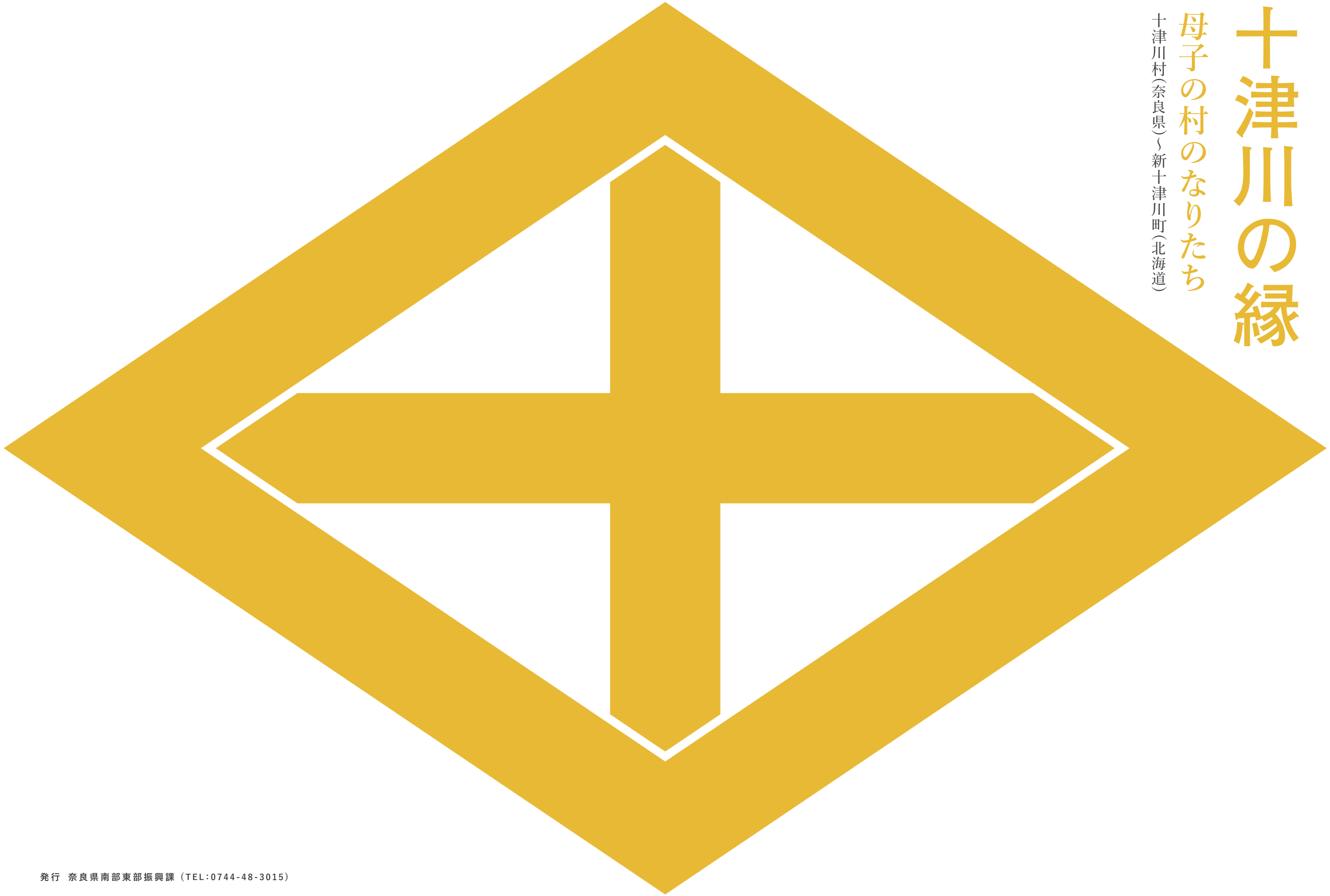


十津川の縁

母子の村のなりたち

十津川村(奈良県)と新十津川町(北海道)



すべては、 ひとつの災害から始まった。

時は明治22年8月。『大日本帝国憲法』が公布され、新橋～神戸間をつなぐ東海道線が開業した頃。奈良県吉野郡一帯を、凄まじい豪雨が襲い、十津川村もかつてない大水害に見舞われました。死者は168人。生活の基盤を失った者は約3,000人にのぼりました。新たな生活の地を求めて、2,489人が北海道への移住を決断。神戸から船や汽車を乗り継ぎ、最後は徒歩で50キロものぬかるんだ道を進み、トック原野に入植したのが明治23年6月のこと。水害被害から10ヶ月が経過していました。以降も原生林を切り開く開墾作業は困難を極めます。そんな中でも、母村に倣い文武両道を尊ぶ人々は、教育施設を建設。水田開発も推し進め、大正期には人口も15,000人を超え、道内でも屈指の米作地帯に成長するまでになりました。

入植から128年が経過した現在。新十津川町の人々は奈良県を「母県」、十津川村を「母村」と呼び、平成23年の「紀伊半島大水害」の際には、約5,000万円の義援金等を十津川村に寄付。約1,500キロもの米も届けられました。平成29年6月20日に行われた「新十津川町開町127年・町制施行60周年記念式典」には、荒井奈良県知事、奈良県議会議員団と更谷十津川村長も出席し、祝辞を述べました。新十津川町の熊田町長は、「不撓不屈、質実剛健、一致団結の三つが合わさっての十津川魂を、これからも受け継いで頑張っていきたい」と、その思いを語りました。ひとつの災害から生まれた母子を思い合う心は、世代を超えて受け継がれ、その縁を今なお紡ぎ続けています。



大水害により川がせき止められて湖が出現。
(明治22年 奈良県 十津川村)

北の大地へ受け継がれた十津川のあゆみ



原生林を測量し、区画割が行われた。
(明治23年 北海道 新十津川町)



開墾する様子。作業は困難を極めた。
(明治23年 北海道 新十津川町)



大正時代の街の様子。
(明治23年 北海道 新十津川町)

128年の時を経て、母と子の連携協定が締結



奈良県と奈良県十津川村及び北海道新十津川町の三者は、平成29年8月21日に「奈良県、十津川村及び新十津川町による連携協定」を締結し、特産品の販売や情報発信等について協力して取り組んでいます。



奈良県 十津川村

十津川村は奈良県の最南端に位置する、日本で最も大きな村。面積は約672km²で、奈良県の約1/5を占めています。西は和歌山県、東は三重県に隣接。急峻な地形によって周辺から隔絶され、独特の文化・風土を形成してきました。土地の96%が山林で、村の中央を十津川が流れています。



歴史 History

十津川は、陸の孤島といわれるほど山深い環境にも関わらず、歴史のさまざまな場面に登場してきます。『古事記』『日本書紀』に記される「神武東征」の際に道案内をした八咫鳥が祖先であるという説もあります。672年の「壬申の乱」では、後の天武天皇となった大海人皇子の吉野御軍に参加。戦功をあげて租税を免じられたといわれています。南北朝時代に入ると一貫して南朝方に忠誠を尽くし、足利幕府の成立以後も守護大名は十津川を放棄し続け、封建支配の外に置かれました。豊臣秀吉による太閤検地が行われても租税は徴収されず自治を保ち、幕末には幕府支配を脱して御所警備にあたるなどして活躍。明治4年(1871)には郷民全員が士族(武士階級)に列せられました。都から遠く離れた山間の地に安住しながらも、事が起これば国事に尽くす、誇り高き十津川郷士は、武士団として古来より数々の国事に関わってきたのです。

気候 Weather

年間平均気温は14.4℃。南端から北端までの距離が32kmほどあり、集落ごとの標高差も大きいため、村内の北部と南部で気候はかなりの違いがあります。降水量は、梅雨時期を除けば台風が多発する8月から9月が多いです。

産業 Industry

村の約96%が山林であり、古くより林業が産業の中心にありました。平成23年の紀伊半島大被害を機に「山を守ることは、山の民の責務」と考え、村内で木材の製材・加工・仕上げを行い直接販売する「林業6次産業化」を推進。村をあげて林業再生に取り組んでいます。また、日本初の「源泉かけ流し宣言」を行い、十津川温泉郷を軸とする観光業を産業の2枚看板と位置づけています。

自然 Nature

奈良県・三重県・和歌山県にまたがる国特別名勝の大峽谷「瀬峡」、ユネスコの世界遺産に登録された、全長72kmの聖なる道「熊野参詣道小辺路」、熊野三山の奥の院といわれる「玉置神社」がある霊峰「玉置山」など、壮大なスケールの大自然に囲まれています。

暮らし Living

村内には、約50の吊り橋が架かり、住民の重要な生活道路として使われています。学校は保育所が4つ、小学校がふたつ、中学校・高校がひとつずつ。武蔵・小原・西川という3地区では、室町時代の流れを汲む、国の重要文化財に指定された盆踊りが行われます。



北海道 新十津川町

新十津川町は道央空知のほぼ真ん中、樺戸郡の北端、「石狩川」の右岸にあります。面積は十津川村の約3/4。東部はいわゆる「石狩平野」の一部であり、西部は山岳地帯です。北西側に「暑寒別岳」、西側には「ピンネシリ岳」があり、町の中央を「徳富川」が東西に流れています。



歴史 History

明治23年、文武両道を尊ぶ十津川の人々は、開拓に入るとすぐに学校建設に着手しました。明治24年3月には、「徳富川」を挟む南北に1校ずつ小学校を建設。明治28年には、母村になって高等教育の場として「私立文武館」を創設します。また、明治30年代に入ると北陸地方などからの移住者により、水稻の作付けも本格化。夜盗虫の大発生、石狩川の氾濫などの災害に見舞われながらも、着実に農業基盤を固めていったのです。大正期に入ると人口は15,000人を超え、空知管内で屈指の自治体へと成長。さらに「玉置坊主」という冷害に強い水稻品種を開発し、道内でも第一級の米作地帯となりました。しかしその後、冷害と凶作、戦争という厳しい時代を迎えます。それでもなお、その苦境の中を助け合い乗り越え、戦争終結と共に息を吹き返した新十津川町は、昭和32年1月、ついに念願の町制施行実現に至ったのでした。

気候 Weather

内陸型の気候で、夏は温暖な気候に恵まれます。冬は増毛・樺戸山系の影響を受け、平地で1m、山間では2m近く積雪します。年平均気温は7℃前後。年間降水量は1,500mmで、7月から9月で比較的多く雨が降ります。初雪は10月末頃。4月の中旬頃には雪解けを迎えます。

産業 Industry

町の面積の56.9%が林地、12.5%が農用地です。肥沃な大地を活用した米づくりが盛んで、道内でも屈指の米作地帯であり、酒米については、北海道第1位の作付面積を誇ります。また、メロンやミニトマト、玉ねぎ、アスパラガス、スイートコーンなど北海道を代表する農作物の産地となっています。

自然 Nature

アイヌ語で「男の山」を意味する標高1,100mの「ピンネシリ岳」山頂からは、石狩平野が一望でき、毎年夏には登山マラソンも行われます。周囲が開けた大きな空を真っ赤に染める夕焼けは、それはそれは見事です。春の桜、夏のそば、秋の稲穂、冬の積雪が四季を彩ります。

暮らし Living

幼稚園・小学校・中学校・農業高校がひとつずつあります。農業高校では農業技術のほか、介護や食品衛生管理の資格が取得できます。できるだけ地元食材を使った給食が幼稚園から提供されるなど、町としても子育てしやすいまちづくりに取り組んでいます。

INTERVIEW

奥大和と北の大地で 受け継がれ続けるもの



十津川村長
更谷 慈禧
Saratani Yoshiki

新十津川町長
熊田 義信
Kumada Yoshinobu

未曾有の大水害という悲劇をきっかけに分かれ、奈良と北海道という異なる土地で生きるようになった十津川の人たち。しかし「不撓不屈」「質実剛健」「一致団結」を合言葉に体现される十津川魂は遠く離れても薄まることなく、今なお、お互いの地を思いあい、支え合い、共に行き来しながら暮らしています。そんな母の村、子の町を束ねるそれぞれの首長おふたりにインタビューしました。そこには、これからの不透明な時代を生き抜いていくためのヒントがあるような気がします。

まず、村と町、現在どのような交流が行われているのか教えていただけますか？

更谷村長 明治22年の大水害で村が壊滅状態になった時に、約2,500人が移住しました。それから128年経つのですが、以降、新十津川の方々は「開町記念式」を毎年行っているんです。「もう一年がんばろう」「先人に感謝しよう」という心持ちでされていると伺っており、私たちも必ず出席させてもらっています。入植時2,500人だった人口は現在6,700人に増えてい



ても現在、その2,500人の血脈は全体の1割、700人なのだそうです。にも関わらず、町民の方々が「我々の生まれ在所は十津川なんだ」ということを言ってくれている。

たった1割しかないんですよ？それが本当にありがたいし、なんでそこまでしてくれるんだろうと考えてみると、「開町記念式」を中心に、毎年昔を思い続けて伝え続けてきたことがこの絆をつくってきたのではないかと。村長として、このことをずっと忘れてはならないと思っています。そして平成23年、奇しくも明治の大水害と同じコースをたどった台風によって「紀伊半島大水害」が起きました。明治のときは168名がなくなって、今回も7名が亡くなり、未だ6名が行方不明です。しかしこの水害によって、私たちは村内のみならず、新十津川の方々との絆も改めて感じるようになりました。義援金という形で町から5,000万円という支援をいただいた上に、住民の方たちが自主的に集めてくださったお金を3,000万円もいただいた。血のつながりがある者は1割しかないのに、ここまでしてくれるのかと。その関



係がどれだけ強いのか、痛切に感じました。平成の合併論議があったとき、前町長さんですが、「どうせ合併するなら十津川村と新十津川町で合併しよう」と笑いました。町長も半分ずつしようと(笑)。お酒をいただきながら喋った思い出ですが、忘れないですね。そんな関係は、他にはどこにもないですよ。

熊田町長 当町も昭和30年の災害の時に、母村の方々から義援金をいただいています。お互いがお互いに対して熱い想いを持っていて、困った時には助け合う連携が自然となされる。みんなが親戚であるかのようなつながりが、脈々と受け継がれているのを感じます。昨年、奈良県の荒井知事が「開町記念式」に来てくださって、明治22年当時の知事が移住民たちに対して読まれた告諭、しかも本当に読まれた書面を出してきていただいて、読んでくださったんです。「これから行く北の大地は豊かな地だから頑張って開墾しなさい」「別れは辛いけれど一致団結して頑張れ」といった内容なのですが、先人たちも、この告諭をひとつの糧に大変な開墾に勢力を尽くされたのではないかと思います。とても感慨深かったです。

子どもたちがお互いの町村のことを学ぶ機会などはあるのですか？

更谷村長 うちの中学校の修学旅行の行き先は新十津川町です。中学1年生になると全員が参加しますし、新十津川町からも来てくれています。

熊田町長 うちの全員じゃありませんが、5年生と中学1年生が行かせていただいています。普段は北海道の平地に住んでいますから、当時の水害の写真を見ても、どこでそれが起こったのか、なかなか想像ができないんですね。でも、険しい山々、美しい景色、よくしてくれる母村の人々、神秘的な玉置神社。町のルーツ、村のルーツを職員さんにお世話になりながら肌で感じてくるんです。

更谷村長 子どもだけじゃなくて、20代30代の青年たちも必ず1年交代で交流していま



合える町にしていきたいと思っています。**更谷村長** うちの十津川高校は昨年の入学者が25名だったんです。この学校がなくなる時が、村もなくなる時だと私は思っています。だからこそ、村の中はもちろん、外からも生徒が来てくれるような場所にしなければいけません。ICTの導入なども視野に入れながら、先生方にプロジェクトチームを組んで進めてもらっています。コミュニティスクールじゃないけど、地域で盛り上げて、底上げしているように思っています。そしてこの村で育った子どもたちが外に出て行っても、また帰ってきたいと思う、そんな気持ちになれる環境をつくるのが私たちの務めだと思っています。

最後に、これからの十津川を担う、それぞれの町村の子どもたちに伝えたいメッセージがあればお願いします。

熊田町長 新十津川という町が今は当たり前前に存在しているけれど、それは先人たちが並々ならぬ苦勞をしてくれたおかげだということをお忘れしないでほしいと思います。他府県から来た人たちもたくさん暮らしているけれど、母村があるから新十津川がある。128年育んできたこの縁を、ぜひみなさんも年輪のように育てていってください。

更谷村長 どう伝えたいか、難しいけれど、今住んでいる我々はやっぱり村が好きなんです。なんで好きになったんだろうと考えていくと、やっぱり新十津川があったり、水害があって大変な苦勞をして「それでも自分たちでつくりあげてきたんだよ」というような話をずっと聞いたり、体感したりを積み上げて、だんだん好きになってきたんだと思う。そうして私たちが体験させてもらったことを、みなさんにも体験してほしいと思います。そのために私たちがしなきゃいけないことは一生懸命です。先人から受け継いだものを残していくことが、次の世代が十津川を好きだと思う、外に出ても惚れ直すことにつながるような気がします。そんなことを、頭の片隅に置いておいてもらえたらと思います。なんともまとまりませんが、「いつでも帰ってこいよ〜」、そういう気持ちです(笑)。

全国的な人口減により、十津川村も新十津川町も例外なく少子高齢化が進んでいます。外からの移住・定住を促すために、どのようなことをお考えですか？

熊田町長 外から人がやって来なくなるためには、まず新十津川の人たちが「住んでよかった」と思っていることが大事だと思います。そのために、高齢者のことはもちろんですが、未来を見据えて「子育て支援」と「教育の充実」を大きな柱に据えた総合計画づくりを進めています。これは母村の、文武両道の精神に倣ったものです。医療費の助成や遊び場の整備など、子育てしやすい環境をつくっていき、些細なことかもしれませんが、行き来する人たち同士が挨拶し